

第4回木更津市立小中学校適正規模等審議会会議録

○開催日時：平成21年10月22日（木）

午後1時30分から午後4時30分まで

○開催場所：木更津市役所6階会議室

○出席者氏名

審議会委員：佐伯康子、内田慎一郎、石井徳亮、坂井麻貴子、豊田雅之、
池田利一、金子邦夫、山口嘉男、加藤淳、石渡宏

教育委員会：初谷教育長、栗原教育部長、露崎教育部次長

（教育総務課）星野副課長、藤尾副参事、山口主査

（事務局 学校教育課）高澤参事、竹内副課長、石井主幹、
安見主査、鶴岡主査

○議題等及び公開非公開の別

議事 (1)市街地、新市街地の小中学校の適正配置について：公開

1 開会（佐伯会長）

ただいまより第4回木更津市立小中学校適正規模等審議会を開催します。

—配付資料確認（竹内副課長）—

2 会長あいさつ

本日は第4回目の審議会となります。

第1回では、教育長から諮問書をいただき、第2回では現状の把握、課題の整理、また第3回では適正規模について審議しました。本市の適正規模は12学級から18学級としたところです。そこで、今回と次回の審議会では、市街地・新市街地の小中学校の適正配置について、学校予定地の利活用を含めた大事な会議となります。18校について検討を加えていくこととなりますので、いつもより時間が長くかかってしまうと思いますけれども、委員の皆さんから多くのご意見をいただきたいと思いますので、ご協力をよろしくお願いします。

3 教育長あいさつ

みなさんこんにちは。秋も深まってまいりました。インフルエンザの広がりを憂慮しているところですが、委員の皆様には大変お忙しいなか、この審議会にご出席をいただきましてありがとうございます。

会長からお話がありましたけれども、3月19日に第1回会議から会議を重ねて、今回は第4回会議となります。この間様々な、そして大変貴重なご意見・ご指摘をいただきながら、前回小中学校の適正規模を検討し、「木更津市としては12学級から18学級を望ましい規模とすること、これを基にして、地域の実情

を生かすことを根底に置く」ということが確認されています。このことを受けて、議論は市街地・新市街地にある学校について吟味検討に入っていますが、個別の学校の課題を確認しながら、適正な配置ということでもありますから、全体を俯瞰する視点、つまり学校と地域との関係、行政区域との関係、通学区域あるいは通学距離の問題ですとか、学校予定地の利活用というような問題などにも議論が及ぶことにもなろうかと思えます。

気骨の折れることではあります、よろしくお願いいたします。

—資料について説明—

(説明概要)

- 竹内副課長
- ・資料1「小中学校保有教室数一覧」について
第1回審議会の「資料5 平成21年3月5日作成」の、平成21年10月16日現在の最新版となります。
 - ・資料2「小中学校校地面積等一覧」について
表の見方としては、小中学校の設置基準によりまして、学校ごとの面積、設置基準、運動場では200メートルトラックがとれるかどうか等を表示してあります。
 - ・「規模、施設、配置等の現状」について
委員の皆様からの意見をまとめて更新したものです。

4 議 事

佐伯会長 それでは本日の議題に入りたいと思います。
議題の(1)「市街地、新市街地の小中学校の適正配置について」、まず適正配置の基本的な考え方について、皆さんと共通の理解をしておく必要があるのではないかと思います。次の議題の、各学校の適正配置を審議するために重要な内容となりますので、この点につきまして事務局から説明願います。

竹内副課長 適正配置の基本的な考え方ですが、7項目が挙がっています。
1つ目は適正規模を確保すること、2つ目は地域特性に配慮すること、3つ目は児童生徒数の将来推計を考慮すること、4つ目は通学距離を考慮すること、5つ目は通学の安全性を確保すること、6つ目は施設の現状を考慮すること、7つ目は指導体制をはじめとする学校教育環境を考慮すること、となっています。

佐伯会長 適正配置の基本的な考え方を踏まえて、適正配置の方策を考えていくこととなりますが、具体的には学校の統廃合、通学区域の変更、学校予定地の利活用などが考えられると思いますので、審議をするうえで頭に

おいておきたいと思います。

第3回の審議会において、本市における適正規模は、国の基準を踏まえ12学級から18学級としました。

適正規模については、決定した12学級から18学級に近づけることが理想ですが、国も「地域の実態その他により特別の事情のあるときにはこの限りではない」としています。適正規模から外れるからといって、無理やり適正規模にしなければならないということではありません。

前回の審議会の中で、委員の皆さんから、単に規模の大小だけを見るのではなく、地域との関わりを大事にして考えていくべきとのご意見がありました。大規模校、小規模校にはそれぞれにメリットがあります。そこで、皆さんから出たご意見を踏まえて一覧表にまとめました。これを確認して、審議会としての意見としていきたいと思っています。

それでは、18校の適正配置の個別の審議に入ります。

進め方としては、これまでの審議を通して委員の皆さんにまとめてきていただいた「規模、施設、配置等の現状」と、教育委員会が課題としてまとめた「各学校の課題等」を照らし合わせながら、1校ずつ見ていきたいと思っています。

まず、木更津第一小学校から審議をしていきたいと思っています。

石井委員 学級数は平成21年度で17、平成27年度で16ということですね。第一小学校の施設関係ですが、建設年度は昭和30年・31年となっていますが、平成20年度に校舎を改築しています。就学可能学級数と余裕教室数はどちらのデータでしょうか。

星野副課長 ここに挙げさせていただいているデータについては、文部科学省への施設台帳データの報告のルールに沿ったもので、古い校舎のままの数字です。現在は若干変わっています。PFIで改築を進めていますが、第一小学校については、普通教室が18、特別支援学級が3ということで、このデータで掲げてあります教室数という意味では、18と3で21なのですが、実際には平成21年度特別支援が2学級で普通学級が17という状況となっています。余裕教室数については今年いっぱい校舎棟が全て完成しまして、それから第一小学校の校長のもとでの学級編制、配置が確定しますので、今のところ配置状況については未定ということで、完成後のデータが書けないことから、古い建物のデータをそのまま挙げさせていただいているという状況です。

石渡委員 余裕教室の考え方として、いろいろ使っている学校がありますね。一小は教育相談室に使っているということですが、東清小は教育相談室を設けていない。余裕教室は現在使われていないということでしょうか。

高澤参事 余裕教室は、普通教室に転用可能な教室ということで、児童生徒の人数の関係で現在は普通教室として使用していない教室ということです。その教室を生徒会室や教育相談室に活用したりと、活用状況は各学校

に任せています。普通教室の広さをもっていて、現在普通教室に使っていないということです。児童生徒数が多くなつたときには、転用して普通教室にできる教室です。

佐伯会長 木更津第一小学校は、運動場の広さの問題はあるものの、大きな課題はないということで、次の西清小学校に進みたいと思います。

西清小学校については、児童数は横ばい、教室は足りていますが、敷地が小さいですね。狭隘のため体育館の上にプールを設置しても、十分な運動場が確保できないということが問題点としてあげられていますが、教育委員会どうですか。

竹内副課長 資料2の小中学校校地面積等一覧をご覧くださいますと、200メートルトラックも、100メートルの直線も設置することができません。設置することができるのは120メートルトラック、50メートルの直線となっています。児童数の少ない東清小学校や富岡小学校と比べてもかなり狭い状況になっています。

石井委員 狭いのが原因で体育のカリキュラムがうまくできないとか、そういったデメリットは発生しているのですか。

高澤参事 子ども達が活動するなかで、不便は避けられない状態だと思います。教育課程で、授業の内容は他の学校と同じように消化はしています。ただ、敷地が狭隘ですので、他校と比べると子ども達がのびのび過ごせるかといった面での窮屈さはあるのではないかと考えています。

佐伯会長 将来的にはそういった不便さを克服する統合といった可能性も考えた方がよいですかね。

石渡委員 西清小は借用地があるのですが、これもずいぶん消極的な体制だと思います。もっと借りれば面積を増やせるということでしょうか。

星野副課長 西清小学校の借用地はもう何十年もお借りしています。隣接している日枝神社の土地をお借りしてまして、西清小学校が他校と比べて校地が非常に狭いなか、グラウンドを拡張してはという考え方もできるかと思いますが、実情は、東側は旧国道、回りは住宅地、そして西側も市道ということで、かろうじて、日枝神社のご協力をいただいて約940平方メートルの敷地をお借りしている状況です。現在の西清小学校でグラウンドを拡張するのはかなり厳しい状況と考えています。

金子委員 他にも幾つかの学校に借用地があるようですが、これも同様でしょうか。

星野副課長 学校が成立するために必要な用地を市民の皆さんからお借りしているということです。借用地がないと、学校の敷地が成立しないという状況です。

佐伯会長 西清小学校については、将来的にはともかくとして、特に今すぐ解決する課題はないということで、次の木更津第一中学校に進みたいと思います。

木更津第一中学校は、特別教室を普通教室に転用することで27年度

までは足りる、敷地面積は十分、将来的な生徒数はやや増加傾向と予想されています。

石井委員 通学区域が第一小学校区と西清小学校区の一部学区であるということで、西清小学校が二つの学校に分かれるかたちになっていますが、これによる弊害はみられていますか。

高澤参事 第一中学校は第一小学校学区の中心部には位置していますが、西清小学校の学区から来る子ども達にとっては距離も少し長くなりますし、大きな道路を渡ってくるかたちになりますので、今までに大きな事故は起きていませんが、安全面についても若干負荷があるかとみています。

とりわけ大きな弊害というのは、今のところ入ってきていません。

佐伯会長 第一中学校については、とりたてて大きな課題はないということで次に進みたいと思います。

木更津第二中学校区について審議をいたします。この学区は桜井小学校予定地、真舟小学校予定地、真舟中学校予定地がありますので、この活用についてもあわせて審議をしていく必要があると思います。

まず、木更津第二小学校をみていきたいと思います。

教室は足りている、敷地面積は十分、児童数もほぼ横ばいということですが、課題としまして国道幹線及びバイパス道路があり交通量もきわめて多い、地域によっては交通機関を利用する児童もいるということが挙げられています。

内田委員 第二小学校については、バイパス等があって非常に通学が大変だという問題がありますが、この学校は前回の学区の再編で真舟地区が二学区に組み込まれたわけです。真舟の方たちがかなり通学区域について調べて、安全等確認したりと、組み込まれるにあたって努力したと聞いていますが、組み込まれたことによって何か問題点がありますか。

高澤参事 真舟地区から第二小学校に通っている子供たちは現在114人います。国道やバイパスを横切ってくるわけですが、歩道の整備ですとか、横断歩道を設置していただくとかいった手立てを委員会で図ってきました。交通安全が一番だということで、現在学校支援ボランティアの安全ボランティアの皆さんが毎朝立ってくださっていますし、交通安全協会の皆さんも立ってくださっています。大きな事故等も今のところ起こっていません。学区を見直した当初は、小さな子どもたちが遠くて疲れるといった話を聞きましたが、その後は取り立てて課題となるような話は聞いていません。

佐伯会長 114人が真舟地区から通っているということですが、全体の児童数は。

星野副課長 583人です。

佐伯会長 約5人に1人が真舟地区から通学しているということになるのですね。

次の請西小とあわせて考える必要があると思うのですが、請西小は2

7学級の大規模校、木更津第二小学校には通学の安全が心配される場所があるということ、それから学校予定地があるということ、位置関係はどうなりますか。

星野副課長 〔地図で説明〕

内田委員 この問題点は、学区の端に学校があるということだと思います。

二小も請西小も学区の端にあって、今人口がどんどん増えているのが南の方というところを考えると、例えば二小学区では、桜井小学校予定地がほぼ中央に位置していて、真舟地区からも近い。学校予定地の活用を含めて、いびつになった学区を、総合的に考えなければいけないと思います。

石井委員 二中が狭くなっているという話がありますので、例えば二中は真舟中学校予定地に移転して、大きい面積のなかで中学生に学んでいただいて、今の二中の敷地を小学校用地に転用するという方法もとれるのではないかと思うのですが。そうすると、中学校の生徒の数が集中してくるといふかたちになれば、真舟小学校予定地もクラブ活動とかで使用できる距離の範囲内に入ると思いますので、そういった点からもよいのではないかと思います。

金子委員 請西小の辺りも非常に交通量が多いところです。また、学校は児童が急増してプレハブ校舎があります。請西南のほうも、今すごい勢いで開発をしていてこれから発展していくところですし、真舟小学校予定地に小学校が建てられればと考えます。

もう一つ、このことを考えていく上で、先日テレビで木更津のみなど再生、元気の出る木更津ということで、東京横浜あたりからどんどん人口が流入しているという話がありました。考えるスパンとして、10年とか15年とか予見するのは難しいとは思いますが、その辺のことも考慮に入れて考えていくと良いと思います。

石渡委員 人数のバランスで、小学校保有教室一覧をみると平成27年には請西小学校は今より少なくなる。その請西小の子が行く第二中学校をみると、平成27年には今より増える。これはどういう動きがあるのですか。

高澤参事 規模、施設、配置等の現状については、現在の住民基本台帳の数字でみています。請西小学校は、これを見る限りでは21年が893人で27年が858人ということで35名ほど減っています。今の状況だけでみると若干減っていくということです。ただ、社会増があるだろうという見込みですので、まだまだ増えるだろうと予測されているところです。

第二中学校の方は、請西小が減りますが中学校は30名ほど増えるかたちになっています。これは、1年ごとにスライドしていったときに、小学校は6学年ありますけれど、中学校は3学年だけですので、3年分が上がってきたときに、増えたり減ったりというマジックが出てきます。小学校6年間を見ると減っても、中学校については人数の多い学年の子どもたちが上がってきた年は増えるということになると捉えています。

学級数についても同じことがありますて、人数が30名増えても分散されてしまいますので学級数が変わらない場合がよくあります。

豊田委員 第二中学校区全体を考えると、今住んでいる方々でほぼ一杯のような状況で、空いている土地に新しく住まわれると更に足りなくなる。そう考えると、魅力的なまちづくりということからみても、子育てするには小中学校が近いのが良いのではないかと。そういう観点からも、やはり真舟小学校予定地とか真舟中学校予定地の活用はぜひ必要だと思います。

佐伯会長 請西小はすでに適正規模を上回っていて、さらに児童数も増してくる見込みということから、近い将来適正配置の方策を講じたほうがよい。その場合には、通学区域の見直しも入ってくるし、学校予定地のことも見直していったらよいのではないかとということです。

では、木更津第二中学校について見ていきたいと思います。

石井委員 さきほど第二中学校を小学校に転用して、という話をしましたが、中学校の施設を小学校に転用できないような案件がありますか。逆も然りです。

星野副課長 中学校用地を、具体的には二中の跡地を小学校にということですが、学校の設置にあたりまして国の認可、手続きが必要になってきます。廃校の手続きがあって、新設の手続きがあって、ということで一つ一つが完結していきますので、例えば二中が真舟中予定地に移転するという手続きが済めば、跡地については小学校を設置したいという手続きが、いろいろな要件をクリアできれば問題はないと理解しています。逆も然りです。

石井委員 手続き的なものは分かりましたが、施設そのもの、例えば耐震未実施となつていますが、耐震工事とあわせて小学校用に補修が可能かどうかということについては。

星野副課長 小学校として中学校の跡を使うということであればまず問題はないかと。小学校の建物を中学校で使うときに、面積の関係で実質的に使えるかどうかという部分はあるかもしれませんが、基本的には使えるのではないかと考えています。

内田委員 中学校と小学校を考えたとき、中学生はある程度体力もついて通学距離はあまり問題にならないのではないかと、小学生はある程度近いほうがよいのではないかと思います。

予定地の中で中学校予定地となっているものが小学校になつても問題はないということですか。

星野副課長 基本的には問題ないと考えています。

内田委員 そうすると、どんどん増えていくのが南のほうなので、二小・請西小はそのままにしておいて、請西のこれから増えるであろう地区と二小の真舟地区を、真舟中学校予定地を小学校予定地にして三分するとちょうどよいのかなと地図上ではみられると思います。

坂井委員　子どもが二中に通っていて、真舟に住んでいます。中学校2年生の子が小学校6年生のとき、平成19年度に二小学区のほうに変更になりました。これから請西南の人口が増えてくるので、真舟中学校予定地や真舟小学校予定地に学校を建てて通わせるようになったとして、気持ちの問題ですが、真舟は今後人口が増えないのではないかと感じています。そうすると真舟自体はだんだん高齢になっていくのに、よその地区から学校に通うお子さんが来る。二中に真舟から行っている子たちと、真舟に近い子たちを真舟小学校・中学校に戻しても、その子たちが卒業して、よそから通ってくる子が多かったときに、真舟の自治会やボランティアの人たち、今パトロールをさせていただいている人たちがいますが、そういう人たちがこの先出てきてくれるかなということを考えてしまいました。

真舟地区では、今30代の人たちが小学校に行っているときに、学校用地があるのだから学校を建ててくれと一生懸命活動しました。自分たちが一生懸命やったときには建たなくて、今になって建つといたら、地域として協力していけるかと考えると、どうなのかなと。

例えば真舟に中学校だけを作った場合は、真舟から二小に行っている子たちが上がってくるので、しばらくは住民の人たちも穏やかな気持ちでいられるかと思いますが、真舟自体も、高齢になって自治会を抜きたいという人もでてきていて、どちらかというところから育っていくまちではない。そういうところに学校が建ってしまって、なおかつよそから人が来るということを考えると、ここでいいのかなと思います。

佐伯会長　慎重に考えなければならないということですね。ただ新しく作ればいいということではなく、地域のことを考えて。

石渡委員　木更津第三中や太田中は、地元の人ほとんどいませんでした。新日鐵の誘致によって新しく生まれたわけです。そういうことは急変する現代社会においては当然有りうることではないかと思います。ですからその点は、例えば真舟中学校ではなくて新しい名前をつけて、誰もが行けるような体制作りをするのでよろしいのではないかと思います。

石井委員　これから学校を新設することになった場合、人口の増加があれば減少もあるわけで、人口が減少したときに、空き教室がたくさん残ってしまう学校が出てくると思います。そういった場合に、地域のコミュニティセンター的な活用ができるつくり方しておくといいいのではないかと思います。地域全体で、子どもたちを見守っていける活用の仕方ができるのではないかと。これから新設する学校には、公民館とかコミュニティセンターのような意味合いのものに転用していけるようなつくり方をしていけば、今後5年10年だけでなく、数十年先にも十分活用できるのではないかと思います。

佐伯会長　長期的な視野に立って考える必要があるということですね。

星野副課長　第二中学校の審議について、事務局から一つ課題として再確認の意味

でご説明させていただきます。

第二中学校につきましては、第二小学校と請西小学校の学区の子どもたちが通っています。ただし、請西小学校の子どもたちは中学校に入るときに、学区見直しによって一部太田中学校に行きます。他にも西清小が一中と三中に分かれていて、祇園小が三中と清川中に分かれています。請西小が二中と太田中に分かれているということも、課題の一つと考えています。

佐伯会長 大きな課題ですね。

石渡委員 桜井に実家がありますが、あのあたりはほとんど人口が増えていないと思います。桜井小学校予定地はどういった方向性で予定がたてられたのですか。

星野副課長 桜井小学校予定地は、当該地区の区画整理がありまして、その際に区画整理の計画のなかで学校用地として計画をして、市との協議で、将来を見込んで取得したということです。

学校予定地の多くが、土地区画整理事業あるいは開発行為による寄贈等で市が取得しているという経緯です。桜井小学校予定地についても、そのような状況です。

佐伯会長 石渡委員からお話のあったとおり、人口の増加とかが今後見込まれるということは、この地区ではないのですか。

星野副課長 現在は無いということです。

佐伯会長 そうすると、桜井小学校予定地については活用の方向性はないということでしょうか。

石渡委員 そう思います。

佐伯会長 それでは、真舟小学校予定地と真舟中学校予定地については、長期的な視野にたって、建物の活用というものを考えて、今までの経緯を踏まえながら将来活用する方向を考えていくのがよいのではないかと、桜井小学校予定地については、消極的ということですね。

《休 憩》

佐伯会長 それでは次に進みたいと思います。次は第三中学校について審議をするべきところですが、太田中学校が平成23年度から普通教室が不足するという大きな課題を抱えていますので、まず先に太田中学校区から審議をしていきたいと思います。まず清見台小学校です。

教室は足りている、敷地面積は十分である、将来的な児童数はほぼ横ばいと予想されています。教室数をみると大規模校です。

教育委員会のほうは、特に問題はないと考えているようですけれども、どうでしょうか。

適正規模は上回っているのですよね。ですから、ほかの学校との関わりのなかで、また審議の必要性が生じてきたときに考えることとして、

太田中学校の審議に進みたいと思います。

太田中学校については、大きな課題があります。教室は23年度から不足する見込みであること、生徒数も増加傾向であることが挙げられています。教育委員会も、平成22年度は特別教室の転用により普通教室を確保するが、23年度から不足することを課題としています。

教育委員会はどのように考えているのですか。

竹内副課長 平成23年度からの教室不足に対しましては、学区の見直しにより対応したいと考えています。具体的には、太田中学校の学区の一部を、隣接する第三中学校の学区に編入するということになります。

これによりまして、清見台小学校の子どものうち、一部は新たに木更津第三中学校へ通学することになります。

木更津第三中学校については、来年度改築予定ですが、学区の見直しによる生徒増を見込んだ設計となっています。

豊田委員 教室不足の解決策として、学区を見直して生徒数の調整を図るというお話でしたが、そうすると清見台小学校の子どもたちは今まで全員太田中学校に行っていたものが、第三中学校と太田中に分かれて通学することになるということですか。

竹内副課長 そのように考えています。

豊田委員 せっかく一つの小学校から一つの中学校に行っていたものを、分けるというのは好ましくないんじゃないかなと。

私も畑沢小学校と波岡小学校の学区変更を経験してしまして、3年経ってしまだにコミュニティの混乱は生じているところです。

太田中学校があまりにも教室が足りないということであれば、学区変更もやむを得ないのかもしれませんが、若干のキャパシティ増ということであれば、現状で何とか入れてあげられるような方策は考えられないのでしょうか。

竹内副課長 今現在の市としての考え方ですが、第三中学校を含めたなかで、学区変更を考えています。

坂井委員 コミュニティの混乱というのは、具体的にはどんなことがあるのですか。

豊田委員 例えば、中学校区に一つ公民館が設けられているのですが、畑沢小を例にとると4分の1くらいの子どもたちが波岡小学校に行っています。畑沢公民館のすぐ近くの児童だけでも、波岡小学校に行っている。そうすると、地域の公民館行事にしても、畑沢公民館の近くに住んでいるんだけど、コミュニティとしては波岡中学区に入ってしまう。畑沢小学校で行う行事とか、畑沢公民館で行う行事にも、地域の子どもたちみんなをお招きしたいけれども、学区的には波岡小学校になってしまっている。

青少年育成会議についても、同一小学校同一中学校であればいちばん良いのですが、一部が分断されて、オーバーラップしてしまって、波岡

小学校の学区としては、どちらの会議に出たらよいのか、どちらが中心なのかというところでも非常に困っている状況だと思います。

佐伯会長 請西小の児童が、木更津第二中学校と太田中学校に分かれて進学しているという状況もありますよね。これを仮に木更津第二中学校だけにした場合というのは可能ですか。

竹内副課長 現状の施設では難しいと思います。請西小学校から太田中学校に進学している人数が多いので、その分を二中学区とした場合は木更津第二中学校が受け皿として非常に厳しくなります。

佐伯会長 真舟中学校予定地を活用する方法ではどうですか。

竹内副課長 真舟中学校予定地に第二中学校が移転し、施設規模が現状より大きくなった場合は可能かもしれません。

佐伯会長 学区の変更は子どもたちのこと、コミュニティのことを考えたときに大変難しいということですので、真舟中学校の予定地を活用する方法は考えることができますね。

加藤委員 この審議会に参加して非常に責任の大きさを感ずるところですが、大きなコンセプトが必要ではないかと思うのです。今、既存の小中学校は木更津市の成り立ちによっていて、何々村と何々村が合併して現在の木更津市ができた。そしてその後開発されたところに新たに小中学校ができたというのが現状だと思います。

そして、昨今新しい地域が開発されている、となりますと現状の配置においてはひずみが出て当然だと思います。現状を一つ一つ見る見方を中心にしていますけれども、5年先、10年先の市内の人口配置なり、小中学生の配置などを想定して、それを中心に学区や配置などを考えてみるという方法もあるのではないかなと思います。先ほどコミュニティの話も出ましたが、それも当然考慮しなければならないことですし、いろいろな考え方を出していって検討するというのも良いのではないかと思います。適正規模・適正配置というのがどういう観点を中心に考えるものなのかというのを感じたところです。

佐伯会長 グランドストラテジーの必要性についてご提案くださったということですね。事務局どうですか。

高澤参事 おっしゃるとおりであると事務局も考えています。今回個別の小中学校についてのご意見をいただいておりますが、今回は今回出されたものを振り返るなかで、最終的には将来的な展望、本市の市街地の大きくみたところのコンセプトについてもとりまとめがされればと考えています。

加藤委員 せっかくの機会ですから、いろんな問題について考えていくことが良いと思います。

佐伯会長 太田中学校の教室不足の課題に戻りますが、これは学区の見直しとかではなくて、施設の整備によって解消したほうがよいのではないかということについては、清見台小学校の児童が二つの中学に行くというのではない方法で考えるべきであるということですね。

では、次に第三中学校区について審議したいと思います。

西清小学校はさきほど審議しましたので、祇園小学校について考えていきます。教室は足りている、敷地面積は十分である、将来的な児童数は減少傾向と予想されています。

石井委員 祇園小は、敷地面積は広くとられていると思いますが、学校の先生がその前の有料駐車場に車をとめて通っていると聞いたことがあります。そういった面では面積が足りないのでしょうか。

星野副課長 祇園小学校の職員駐車場に関しまして、他に場所を借りているのは事実です。他の小中学校においても、職員が車をとめる駐車場がなくて、同じように有料で借りたりしている学校が幾つもあります。

教職員の通勤用の車両駐車場を敷地内に担保しなければならないという考え方には基づいていません。とめられるなかではとめていただいています。とめられない場合には、各学校ごとに駐車場の確保を図っていただいている状況です。

石井委員 それは市の予算で借りているのですか、先生の個人負担ですか。

高澤参事 市は一切出していません。個人負担です。

佐伯会長 祇園小に関しては、隣の清見台小学校は大規模ですし、西清小学校は敷地が狭いということで、統廃合は考えられないことからみて、このままで、次に進みたいと思います。

第三中学校について審議していきます。

教室は足りている、敷地面積は十分である、将来的な生徒数は減少傾向と予想されます。

平成22年度改築予定となっていますが、これについて事務局説明してください。

露崎次長 第三中学校につきましては、耐震診断の結果非常にI S値が低く、0.23で極めて危ないということで、耐震診断に基づく耐震補強設計を行ったところ、ブレスという補強の具材の入った窓が20面くらいできてしまう、それと中廊下の部分に鉄筋コンクリートの壁で20か所くらい補強しないと今後の地震に耐えられない。加えて三中の現在の校舎には基礎杭がないので、工事をしてみますとどのくらいの工事費が更にかかるか分からないなかで、庁内で費用対効果等を総合的に検討した結果、第三中学校については建て替えを行うということで意思決定しました。

計画では、22年度末には工事を完了したいということで進めています。現在国において経済対策というかたちで臨時交付金の予算措置はされたのですが、政権が変わりまして、具体的に市への配分が幾らだということが出ていませんので、工事費についてまだ市議会に予算の計上をするに至っていません。ただ、本来の補助金であります安心安全学校づくり補助金につきましては、すでに文科省の交付決定を受けていますので、併せて公共投資臨時交付金の額が確定すれば、すぐに議会に工事費の予算等を提案させていただいて、早い時期に工事に着手したいという

状況です。

教室数については、木更津第三中学校は27年度10クラスになる予測ですが、改築におきましては、各学年4クラス、12クラスの教室を備えた学校に整備するという方向で設計を検討しています。

佐伯会長 適正配置の方法として、通学区域の変更が考えられますが、清見台小学校についての審議で意見がありましたように、一つの学校を分けてしまうのはよくない、そうすると現在分かれている祇園小学校から、清川中学校に行っている児童が全部第三中学校に進学してはということが考えられると思いますが、そうすると清川中学校の生徒数が大幅に減少してしまうことになりませんか。

竹内副課長 確かに清川中学校の生徒数が減少することが考えられますが、南清小学校の児童数が増加する見込みです。ほたる野地区の人口が増えてきていますので、今後は増加するものと思われれます。

佐伯会長 第三中学校は生徒が減り、清川中学校は生徒が増えるということが予測されていて、一つの小学校が中学校で分かれるのはよくないということから考えると、祇園小学校の児童が全て第三中学校に行くという学区変更が考えられますか。

露崎次長 本来一つの小学校を分けるのはあるべき姿ではないということで、第三中学校については12学級、適正規模を目指した学校を建設したいと考えていますので、祇園小については全て第三中学校に編入できるようなかたちで方向性を導いていただければと考えます。

佐伯会長 確かに適正規模からも、祇園小から皆第三中学校という方法は良いと思います。

石渡委員 一つの小学校が一つの中学に行くのが良いのは分かりますが、通学距離についての配慮はどうでしょうか。

高澤参事 祇園小学校については、通学距離が学区全域ほぼ2キロ以内ですので、仮に第三中学校に通うことになった場合であっても、一番遠いところも十分文科省の基準とする範囲内です。

豊田委員 祇園小の子どもたちが皆三中に行くことで、一小学校一中学校になるので、なおさら太田中は先ほど言ったように進めてもらいたいと思います。

佐伯会長 それでは、畑沢中学校区について審議をしていきたいと思います。

ここは畑沢中学校予定地がありますので、その活用についてもあわせて審議したいと思います。

まず畑沢小学校については、教室は足りていて、敷地面積は十分であって、将来的な児童数は減少傾向と予想されています。

今は26学級ということで大規模だけれども、27年度には適正規模になるという見込みですので、適正規模・適正配置の面からは特に課題はないですね。

では、畑沢中学校の審議に移ります。

畑沢中学校は、教室は、特別教室を転用することにより平成27年度までは足りるものと予測される、敷地面積は十分である、将来的な生徒数は増加傾向と予想されるということです。12学級から15学級に増える見込みです。

豊田委員 畑沢中学校も畑沢小学校も適正規模に近くなっていくということであれば、今変則的に波岡小学校が波岡中学校と畑沢中学校に分かれているということも将来的に解消できれば一番良いのかなと思います。

ただ、変えたばかりでまた変えるとなると住民の方々の感情的にもどうなのかなとは考えますが。

高澤参事 学区を変更した当時は、友だちと別れたくないということで、上のお子さんは畑沢小に残ったままで、下のお子さんは波岡小というご家庭がありました。現在は兄弟関係で分かれている子どもはゼロと聞いています。小学校の児童数がこれから減少していくとみられますので、今波岡小学校に行っている子どもたちが畑沢小学校に戻るということについては十分可能です。ただ、4年前に変更をして、4年後に戻ってよいとなったときには、やはり保護者や住民の皆さんの感情もいろいろあると思います。もしやるのであれば、私見ですが、今波岡小に通っているお子さんはそのままでも構わないといったような諸々の条件をつけながら、そういう方向も可能なのかなと考えます。

豊田委員 将来的にそういう方向が選択肢にあるということで、よろしいのではないかと思います。

佐伯会長 畑沢中学校予定地については、今のところ適正規模に集約していくということであれば、とりたててここを活用していく必要性は認められないということになりますか。活用の可能性は低いものと考えられる、ということですね。

波岡中学校区について、審議してまいります。

波岡中学校区には、八幡台中学校予定地、大久保小学校予定地がありますので、その活用についてもあわせて見ていきたいと思えます。

まず波岡小学校について、教室は足りている、敷地面積は十分である、将来的な児童数は今後数年増加するけれども、その後は減少することが予想されます。教育委員会は、交通の激しい道路に接しており、一部通学路は道幅が狭いうえ交通量が多く危険であることを課題と捉えているようです。

青柳委員 最初に金子委員からご指摘がありましたように、借用地がありますね。どこの地域でもそうですが、学校単独だけでは考えられない。コミュニティが分断されるとか。公民館関係は、今は色々と子どもたちとも関わりが多くなっていると思いますので、できるだけコミュニティと学区が合わさっていくようなかたちで考えていきたいと思えます。その点が非常に難しいと感じています。

石井委員 大久保小学校予定地は、羽鳥野のほうから直接行ける道はないのです

か。

星野副課長 羽鳥野側に敷地は接していますが、車で羽鳥野側から直接つけることができません。歩行者については、羽鳥野の住宅街の市道から敷地の東側に階段・スロープで降りられます。なお、波岡公民館が敷地の西側にありまして、その横が予定地の入り口になっています。羽鳥野側からの車のアプローチとなると、現状では直接来られないような状況になっています。

石井委員 大久保小学校の予定地を活用する方法はなかなか見受けられない気がします。この地区には八幡台小学校の児童が急増するということがありますので、それも含めての話をしたほうがよい気がします。

八幡台小学校の隣に八幡台中学校予定地があります。道路を挟んでいるのだと思いますけれども、例えばこの用地を一括活用して、昔私が鎌足中学校にいたときは小学校と中学校が同じ敷地にありましたので、小中一貫校的な使い方をして、施設一体利用とかを考えれば十分活用できるのではないかと考えました。

佐伯会長 確かにそうですね。八幡台小学校が急増するので、あわせて考えるほうがよかったですと思います。両方考えていただくと、八幡台中学校の敷地はキープをしておいた方がよいのではないかとというご意見でしたが、ここで八幡台小学校についても見ていきたいと思います。教室が平成23年度から不足する見込みである、敷地は十分、将来的な児童数は増加傾向と予想されるということで、教育委員会も学区における人口急増が見込まれることを課題としています。

波岡小学校、八幡台小学校と同時に波岡中学校についてもあわせて見ていきますと、教室は足りている、敷地は十分、将来的な生徒数は増加と予想されています。

金子委員 八幡台小は2年経てば満杯になってしまうので、折に触れて小学校のことは話題になります。当座はプレハブとかを考えていいのかなと思います。羽鳥野地区が増加に入っています。私の記憶では、八幡台ができて20年くらいは人口増で八幡台小も最盛期3教室4教室が続いたと思います。その後は減少傾向で、今はほぼ2学級、羽鳥野地区のほうからきて、今年度から学級増になってこれからは増えていくということです。

さきほど10年15年の長いスパンで見ていかないとと言いましたが、八幡台は20年で頭打ちでそれからは減っていった、そうすると今羽鳥野は増えています、その辺のことも見定めて。ほかの地区はだいたい現状維持だと思います。シーアイタウンのほうも、波岡小学区も。その辺で、入り口が限られているということなのですが大久保小学校予定地や、八幡台中学校予定地の使い方も出てくるのではないかと考えています。

竹内副課長 第3回に人口見込みを出したのですが、烏田地区の羽鳥野については、

年間158人くらい、児童数を考えると年間20人くらいは増えるだろうと推測しています。ただ、社会増は予測が難しいところがあります。

星野副課長 八幡台小の児童急増に関しまして、教育委員会はやむを得ないというなかで校舎の増設を現在検討しています。その校舎がどのような形状になるのか、鉄筋コンクリート造になるのか、鉄骨造になるのかということについては、まだ正式な決定はしておりませんが、かなりの児童数増加、学級数増になりますので、子どもたち受け入れのために、施設を増築していきたいと考えています。

佐伯会長 施設の増築で対応したいという考えということが分かりました。そうすると八幡台中学校予定地は石井委員から例えば小中一貫教育のようなかたちで活用する方法があるのではないかという意見がありましたけれども、大久保小学校予定地については、必要性はとりたてて考えられないということでしょうね。

豊田委員 小中学校予定地を、小中学校として予定地を利用しないといった場合にはどのようになるのでしょうか。

星野副課長 今回の審議会で答申をいただいたなかで、学校予定地としての見極めをさせていただき、その後学校として利用しないという市としての方向性が出れば、他に公共施設として活用ができるのか、あるいはできないのであれば、有効活用はどのようにするのかということで、新たな検討に入っていきます。最終的に全く利用しないという方向性が出れば、処分、売却ということになるかと思えます。

この審議会では、とりあえず適正配置というなかで学校用地としての活用の方向性を出していただければと考えています。

佐伯委員 それでは、清川中学校区について審議いたします。

まず東清小学校について考えていきたいと思えます。

ここは、教室は足りている、敷地面積は十分である、将来的な児童数は減少傾向であると予測されています。学区における人口減少が見込まれる、平成26年度から複式学級となる可能性があるということが教育委員会の課題として挙がっています。複式学級ということについて、事務局から説明をしてください。

高澤参事 本市では複式学級はまだ1校もないのですが、複式というのは例えば離島やへき地山村といった少人数の学校でおこる現象で、1学級の子どもが少なくなって、1学級で2学年の児童をみていきましょうということです。

千葉県の基準がありまして、小学校1年生と2年生で組むときには、両方の児童数があわせて8人以下、1年生を除く学年、例えば2年と3年や3年4年などについては16人以下という基準になっています。ですから仮に2年生が7名3年生が8名で15人となってしまうと、2学年をあわせて1クラスで勉強していく、というのが複式学級です。

あまり好ましい形ではないと言われていています。担当の教員も1名しか

- 配置されなくなりますので、教育課程上課題が出てくると考えています。
- 石井委員 木更津市ではないのですが、袖ヶ浦市に平岡小学校の幽谷分校があると聞いています。そういった形はとれますか。その学校がどういう対応をしているのかも分からないのですけれど。
- 高澤参事 分校措置という形があります。残念ながら、東清小については分校措置の対象にはなっていません。一つの学区がとても広くて遠いところにあるというのが条件です。東清小学校は、中学校まで1キロかかりませんし、学区についても、若干の距離はありますが、平岡小学校のように通学距離が8キロとか9キロとかいったかたちにはなりませんので、県内でも分校措置の学校は他にもありますが、東清小は対象にはならないと思っています。
- 教育長 幽谷分校は袖ヶ浦市の平岡小学区の林地地区、川原井地区、市原に近い地区ですね、ここの1年生から4年生までだけです。5年生になるとちょっと距離はあるけれども通えるということで、本校に行きます。4年生までは複式学級ではなく、通常学級で編制しています。
- 複式学級というのは一つの教室に先生が一人いて、例えば教室の半分に2年生がいて、半分に3年生がいて、同時に別の指導をする。時には同じ活動をすることもあるでしょうけれども、いろいろな工夫が必要になるという状態です。
- 佐伯会長 複式学級が予想されていくなかで、どうしたらよいのでしょうか。
- 石渡委員 南清小学校は児童の数が多いので、東清小学校との隣接地域の南清小学校の児童が通うというようにはできないのでしょうか。
- 青柳委員 私が居た学校ですので、地区の皆さんの気持ちがよくわかるというか、悩みが多いのですが、石渡さんがお話したように、南清小とか祇園小の東側を入れたいのですけれども、東清小の地域は道路とか山とかでちょうど集落が切れているところなのです。例えば祇園小からくれば交通量の多い広い通りを渡らなければならず、その間はあまり民家がない。清川中学校周辺の南清小の学区も、あまりひらけていないということで、八方塞がりな感じで、解決したいけれども解決の道がないなと思います。
- 昔は日の出団地というところが随分はりついたので、今は高齢化して子どもたちがあまりいないという状況です。
- 佐伯会長 他に挙げられることとしたら何がありますか。
- 教育長 今回の課題に直接適う解決方法ということではないのですが、習志野市は小規模の学校があり、人口が増えない。その学校は市の中で特区になっていて、どこの学区からでもいいですよと。閑静なところで、独特な教育活動が展開できるということで、入学者を広く募って学校を成り立たせているというところがあります。木更津に合うかということは、別問題ですが。
- 青柳委員 教育長のお話ですから大変心強く感じました。へき地の学校にいましたときに、もうちょっと離れたところの学校から、いじめ等いろいろと

問題を抱えているお子さんがわざわざ学区を越えて通ってきたということがありますので、私はどちらかというと、祇園小や増えていく南清小にスクールバスとかを出して東清小の子どもたちを通わせていくほうが順当かなと考えたのですけれども、思い切って、順当な考えよりは逆のような考え方をするのは勇気がいるけれど、落ち着いた良い雰囲気学びたいというというのは確かにあるわけですから、大いに考えていくべきかなと思いました。

豊田委員　とても良いアイデアで、たとえば請西小や畑沢小みたいに子どもたちがたくさんいる中で育てるよりも、閑静な学校に通わせたいという需要はきっとあるのではないかと思います。実現とまではいかないですけども、ぜひそういう方法も有りということで、考えていければ。何でも効率で考えられることばかりではないと思います。

佐伯会長　柔軟な対応、逆の発想を踏まえながら、検討していったらよいのではないかとということで、次は南清小学校の方に移りたいと思います。

南清小学校は、学区における人口急増が見込まれる、平成22年度は特別教室の転用により普通教室を確保するが、23年度からは不足するというので、平成23年度にむけ、児童数急増に対応する増築が予定されているということです。これは緊急な課題と見受けられます。

青柳委員　先ほど学区の変更を考えたときに、東清小との間での変更は無理だろうと言ってしまいましたが、南清小の学区の一部を東清小に変更する可能性はあるでしょうか。

教育長　南清小学校にも東清小学校にも勤務したことがありますので、あの辺の地理はいくらか分かるのですが、谷が深く入っているので、奥から隣の谷に入っていくのには、一回下ってから入るか、尾根を越えるかという地形なのです。今はそこに館山道とアクアラインの道がYの字に入って学区を分断していますけれども、高速道路の脇に側道ができていますから、尾根越えはかなりできるようになってきました。しかしトンネルがあって、子どもの安全の問題を考えなくてはいけない。犬成の奥から伊豆島に抜ける道も新たにできていますので、笹子や犬成の子は南清に抜けるというのは不可能ではない。それからさきほどのスクールバスということも、将来的には考えていかななくてはいけないかもしれません。

習志野の例を出しましたが、木更津の現状に合うかということについては別とお話をしたつもりです。随分共感を得てそれが良いというようになってきましたが、難しい問題があります。規制がありまして、特別なケースですので、こういう例があるということでお話しました。

佐伯会長　南清小に関しては、現在は小規模ですけども、今後児童数の増加によって適正規模になる見込みです。人口急増が見込まれるといいましても、学級数は適正規模には収まるということです。問題は特にないということで、清川中学校の審議に入りたいと思います。

清川中学校は、特別教室を転用することにより平成27年度まで足り

るものと予測される、敷地面積は十分、将来的な生徒数は増加傾向と予想されるということです。ここは東清、南清、祇園小学校の一部の子どもたちが進学する中学ということになります。

第三中学校の審議のときに、祇園小から清川中に進学している生徒を見直そうという意見がありました。それから清川中の生徒の数は6学級から8学級になるということ、これは南清小学校の児童増加に伴ってのことだと判断しますが、現在小規模校であってこれからも小規模校ではあるけれども、適正規模に近づいていくものということで、よいかと思います。

6 閉 会

佐伯会長

本当に長時間にわたりご審議をいただきまして、ありがとうございました。18校全ての審議を終えることができました。今日の皆様のご意見を事務局でまとめて、中間答申の素案について、次は審議していきたいと思います。次回は12月を予定しています。

中間答申に向けて、今後ともよろしくお願いいたします。

以上で終了いたします。

以 上

上記会議録を証するため下記署名する。

平成21年11月27日

木更津市立小中学校適正規模等審議会会長（会 長 署 名）